

平成30年度 特別展

## 幕末維新の激動と福井 —近代日本の夜明け前、福井が描いた国の姿—

これまで、明治維新は薩摩藩・長州藩を中心とする武力倒幕派と会津藩などの佐幕派という対立構図で語られることが一般的でした。しかし、近年、坂本龍馬の書簡が相次いで発見され、龍馬が頼みとした福井藩の動向に注目が集まっています。また、福井藩が重視した「公議」（より多くの人々が加わって議論し、その結論に従って政治を進めていくべきという考え方）の観点から、明治維新を描き直す研究も登場しています。明治維新から150年が経った今まさに、福井藩の果たした歴史的役割や明治維新が再検討されるべき時機に至っています。

そこで本展では、幕末から明治維新にかけて激動する政局のなか、福井藩がいかなる人材を輩出し、どのように行動したかについて、再検討を行います。とくに、福井藩は「公議」を掲げてどのような国の姿を描いたのか、「もう一つの明治維新」について迫りたいと思います。

展示は時代の流れにそって1章・2章・3章に分けられています。加えて、特定のテーマに焦点を絞ったスポット展示もあります。全体を通して、国宝・重要文化財、初公開資料など、多数の貴重な資料を集めて一挙に展示します。ぜひ「本物」の迫力を体感してください。

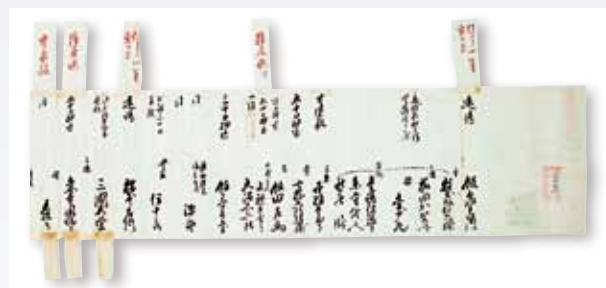
### 1、欧米の脅威と安政の改革

嘉永6年(1853)、ペリーがアメリカ合衆国の艦隊を率いて日本に来航し、開国を要求しました。このいわゆる「黒船来航」に象徴される欧米列強の脅威が広がる中、松平春嶽を藩主とする福井藩は欧米の状況や技術などの情報を積極的に収集しつつ、海防の強化、洋式銃器・船舶の製造、洋式砲術を組み込んだ軍制改革などを着々と進めていました。ここでは、その様相を具体的に示す銃器の実物や図面などを展示します。同時に、橋本左内を登用して教育改革をはじめとする諸改革が実行されました。左内の少年期の志を示す『啓発録』の原本(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)を公開するとともに、藩校明道館

に関する資料なども展示します。

藩政改革を進めて雄藩としての基礎を固めていた福井藩でしたが、無勅許条約調印(天皇の許しをえずに幕府が諸外国と条約を結んだこと)・將軍継嗣問題(13代將軍徳川家定の跡継ぎをめぐる争い)を起因とする安政の大獄では、春嶽が謹慎に処せられただけでなく、左内も刑死、小浜藩でも梅田雲浜が獄死し、有能な人材が非業の死を遂げました。重要文化財井伊家文書のうち「安政大獄処罰案」(彦根城博物館蔵)などを展示し、その様子を探ります。

こうした状況のなか、左内が將軍・雄藩を中心としつつも、身分を問わず有能な人材を登用して適所に配し、「日本国中を一家と見な」して(日本国中が一致団結して)諸外国に対応すべきという国の姿を構想していたことは注目に値します。



重要文化財井伊家文書のうち安政大獄処罰案  
(彦根城博物館蔵)

### 2、文久の改革と公議派

安政の大獄で痛手をこうむった福井藩でしたが、それ以前に熊本藩から招聘していた横井小楠を中心にして、経済政策を最重視する藩政改革を推し進め、富国強兵を図っていました。とりわけ、特産物の生産・販売を管理する制産方を設け、長崎や横浜などを拠点とした海外交易を促進しました。さらに、謹慎が赦免となった春嶽は一挙に幕府の政事総裁職に就任し、小楠をブレンとして幕政改革に取り組みました。

ここでは、小楠が示した国・藩の基本方針である「国是三論写」(個人蔵)・「国是七条草案」(個人蔵)・「国是十二条」(当館蔵)という3種の国是を初めて揃えて展示します。とくに、「国是七条草案」の「外様・譜代に限らず賢才を選んで政治の職につけよ」「大いに言路を開き、天下とともに公共の政を為せ」(藩の格を問わず有能な人材を政治に参加させ、大いに議論を尽くし、私的な政治ではなく天下万民とともに公共の政治を行うべきである)という言葉に、「公議」を重視した、あるべき国の姿を見ることが出来ます。こうした小楠の思想は春嶽だけでなく、由利公正や坂本龍馬にも影響を与え、後代に受け継がれていきました。

ただ、春嶽は開国に反対する朝廷や長州藩などの攘夷(諸外国を追い払うこと)派の対応に苦慮し、幕政改革は頓挫します。その後、福井藩は禁門の変(幕府と攘夷を掲げた長州藩との戦い)や長州征伐(幕府が長州藩を征伐すること)などの戦争に参加しました。この一連の過程で、大政奉還(将軍が朝廷に大政を返還すること)のもとでの「公議」の実現を目指していたことは注目すべき点です。これは土佐藩が提唱して実現させた大政奉還を先取りするものでした。



横井小楠筆「国是七条草案」(個人蔵)

### 3、明治維新への道

本章では、まず、少し視点を変えて、近年注目を集めている福井と龍馬の関係を示す資料を一堂に揃え、それらの関係が当時の政局にどのような影響を与えたのかを探ります。龍馬は春嶽・小楠・公正などと会談し、大政奉還のもとでの「公議」の実現という考えを共有しています。その点は、龍馬が発した「日本を今一度洗濯したい」という言葉や龍馬が提唱した大政奉還・議会制に見て取ることができ、龍馬が構想した「新国家」へと繋がるものでした。また、龍馬は天下の人物として公正を評価し、「新国家」の財政担当として推挙しました。のちに公正は明治新政府の財政を担当することとなります。さらに、近年、龍馬は春嶽を「新国家」の盟主とする秘策を温めていたという説も登場しており、注目されます。

本章では、次いで、大政奉還から明治新政府が形作られる過程の資料を扱います。土佐藩が主導した大政奉還が実現し、龍馬は「新国家」を構想しましたが、

京都の近江屋で暗殺されます。その後、国政の方針を決める小御所会議を中心とする政局では、薩摩藩・長州藩などの武力倒幕派が勢いをつけますが、福井藩は徳川慶喜を加えたかたちでの「公議」の実現、内戦を引き起こさないような平和的な改革を目指します。しかし、歴史は武力倒幕へと進み、福井藩は政局の表舞台から退くこととなります。ただし一方で、福井藩が重視した「公議」・「公論」という言葉が、近代国家の基軸となる「五箇条の御誓文」や、その原案とされる公正筆「議事之体大意」に見えることに注目する必要があります。

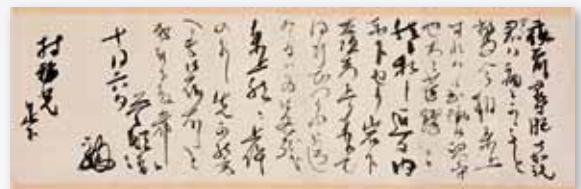


由利公正筆「議事之体大意」(福井県立図書館蔵)

### スポット展示

スポット展示では、「国宝に見る福井の先人」というテーマで、国宝島津家文書 岩倉具視伝記絵図(東京大学史料編纂所蔵)のうち「小御所会議之図」(春嶽が描かれる)と「安政年間(小浜藩主)酒井忠義へ賜膳之図」を展示します。また、もう一つのスポット展示として、「福井藩士伝来の宝」というテーマで、「坂本龍馬書簡 村田氏寿宛」(個人蔵)、「三岡八郎(公正)所持銘入り刀」(個人蔵)、「伝橋本左内紋服」(個人蔵)などを展示します。龍馬書簡は龍馬の花押(サイン)が記されている原本としては現状唯一のもので、大変貴重です。「伝橋本左内紋服」を展示する場所では、複製の着用体験も行う予定です。ぜひ歴史を体感してください。

(大河内勇介)



坂本龍馬書簡 村田氏寿宛 (個人蔵)



伝橋本左内紋服 (個人蔵)

# 十一面観音像懸仏 (質志宮御正体) 一面

[法量] 鏡径天地 30.1、左右 30.7  
 仏像高(像のみ) 11.1(cm)  
 [時代] 貞治3年(1364)

神・仏のすがたとしては、まず絵画や彫刻の像が思い浮かびます。しかし、絵画(2次元)と彫刻(3次元)の間ともいうべき2.5次元の神・仏像をご存じでしょうか。それが鏡に表現された「懸仏」です。

鏡は、古くは貴重であった金属を用い、自然物にはない色彩(金や銀系色)で、光を反射する特性を持ち、姿を写す、本来の役割はありのままの姿=実相を写すものとして神聖視されました。天皇の象徴である三種の神器に「鏡」があることでもわかります。やがて礼拝対象として鏡に神・仏のすがたを表現することがおこなわれます。作例から平安時代前期頃には神や仏のすがたを鏡面に線彫りした「鏡像」が作られたようです。その後、平安時代後期から鎌倉時代にかけて立体的に作られた像を貼り付けた「懸仏」が作られます。当時、鏡像・懸仏は「御正体」と呼ばれていました。仏が日本人を救うため日本の神々に変身するという本地垂迹説により、その神の本当のすがた(正体=仏)を、神道で大切にされる鏡に映し出している状態の造形であることがこの御正体という名称からも察せられます。その後、室町時代から江戸時代にかけて大量に作られ、本来見ることが許されない神(および秘仏)のすがたを具体的に表現して社寺の神殿や厨子の前や上方に懸けられました。しかし、明治初年の神仏分離により神社から撤去され、壊されたり、他所へ流出しました。当館所蔵もそのような末路を辿り、流れ着いたと考えられます。

<形状>鏡面は、界線により内・外区を分け、内区に仏体、外区に鉾止めした飾り鉾を巡らせる。左右上部に獅嚙形の鏡座を付ける。内区には中央に蓮華座上に唐草透かし光背の十一面観音坐像(半肉)、天蓋(前半のみ)、海波(板透かし)、中央から左右に分かれた茎先に蓮華を挿した花瓶(丸彫り)を配する。

<構造>鏡面は二枚の横板を矧いだ上に銅板を乗せ、銅板の外界線で両者を締める。十一面観音像と銅版製の内界線・乳・光背・波・天蓋を鉾止めする。華瓶は木製の器体に銅板を巻き、茎の太い銅線に挿す。

<彩色>全面鍍金、獅嚙の目に黒(眼球)・白(白目)・赤(界線)、歯に白。

<裏面墨書銘>

奉懸 質志御宮  
 御正躰 一面

右為所願成就也仍□

奉懸之状如件

貞治三年六月十八日

藤原政実 敬白

本作品は、十一面観音像が半球状の半肉彫りで作られ、衣紋等を細線で刻み、仏頂面・小面を界線のみで表す点や、天蓋・花瓶等荘厳具で埋め尽くす点、鏡面を内・外区で明確に分ち、外区には飾り鉾を巡らせることなど、14世紀後半の作例と類似した表現方法が使用されており、典型的作例と言えるでしょう。また、裏面の墨書銘が特に重要であり、作風を追認させる貞治三年(1364)銘や、「質志御宮」\*奉懸の記述は本来の所在場所を示しています。

このように破損も少なく、銘により基準作例として非常に良好な資料といえます。

(河村健史)

\*「質志御宮」…京都府京丹波町の酒治志(すじし)神社と見られる。式内社で「質志大明神」とも称された。



# 「明治百年記念展」の パンフレットと図録

[法 量]

明治百年記念展パンフレット 26.5×19.3

明治百年記念展図録 25.5×18.3(cm)

今年は明治元年から150年の節目にあたることから、全国で様々な催しが開催されています。本県でも「幕末明治福井150年博」が開催されており、当館では9月22日から11月4日まで特別展「幕末維新の激動と福井」を開催します。

ここで御紹介するのは、今から50年前の1968年(昭和43)に開催された「明治百年記念展」のパンフレットと図録です。

写真1が明治百年記念展のパンフレット、写真2が明治百年記念展の図録です。明治百年記念展では同年9月28日から10月13日に、第一会場の福井市文化会館で「岡倉天心とその周辺」が、第二会場の福井市立郷土歴史館で「明治維新と郷土の先覚」が、第三会場の福井県立岡島美術記念館で「郷土の名刀と金工」がそれぞれ開催されました。

第一会場では、岡倉天心が使用した物品や原稿、横山大観や下村観山らの絵画、平櫛田中の岡倉天心像など91点が展示されました。

第二会場では、松平慶永(春嶽)、橋本左内、横井小楠、橘曙覧、中根雪江らに関連する資料が展示されました。この中には、「四侯(伊達・島津・山内・松平)肖像写真衝立」や「横井小楠肖像版画」などのように、現在でもよく展示される資料が含まれています。また、西郷隆盛や坂本龍馬などの県外の人物に関する資料も展示されました。展示資料の総数は28点でした。

第三会場では、越前の名工千代鶴作といわれる刀など

30口の刀剣と鑊つばなどの金工品32点が展示されました。

さて、ここで注目されるのは、図録の右下にある「第23回国民体育大会協賛」という文字です。パンフレットの方にも、協賛として「第23回国民体育大会福井県実行委員会」という記載があります。実は、明治百年記念展は同年に福井県で開催された第23回国民体育大会に関連して開催されたという経緯があります。パンフレット巻頭の「明治百年記念展開催にあたりて」には、「三会場とも明治百年にふさわしくそれぞれの意義と特色のあるもので、国体(原文ママ)に集められた県外の方々には本県文化の一端を理解していただくのに、また県民の方々にはいま一度郷土と郷土人とを認識していただくのに、恰好の展覧会」とあり、この展覧会には国体で福井県を訪れた人々に対して、福井の歴史をアピールするという役割が期待されていたことが分かります。

この明治百年記念展にはどれだけの人が訪れたのでしょうか。福井国体後の1969年に刊行された『第23回国民体育大会報告書』には、「県内外の参観者4万5千名を得て三会場とも非常に盛況であった。」と記されています。

明治150年を迎える今年、再び福井県で国体が開催されます。また、国体に続いて、全国障害者スポーツ大会も開催されます。かつての明治百年記念展のように、県内外の多くの人々に特別展「幕末維新の激動と福井」へ足を運んでいただきたいと考えております。

(橋本紘希)



写真1「明治百年記念展パンフレット」

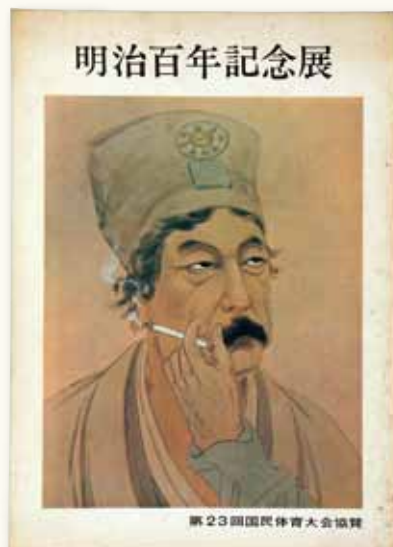


写真2「明治百年記念展図録」



長畝日向神楽「鬼神」

平成24年9月16日撮影

## はじめに

長畝日向神楽とは、福井県坂井市丸岡町長畝に伝わるもので、あまてらすおおみかみ天照大神が、すきのおのみこと素戔鳴尊の乱暴を咎めて天の岩戸に隠れ、その後、岩戸から出てくるまでの神話を演劇的に表現する岩戸神楽の系統の神楽です。昭和28年(1953)に県の無形民俗文化財に指定されています。

この神楽は、もともと、元禄8年(1695)、丸岡藩主となった有馬清純と共に日向国(現 宮崎県)から来た、藩お抱えの舞人によって舞われていたものです。明治維新によって藩が廃され、藩に属していた舞人の手を離れ、長畝の人びとによって舞われることになりました。今回はその点も含め、この神楽の歴史を紹介したいと思います。

## 1. 長畝日向神楽の歴史①

### ～日向から越前へ～

有馬清純は、元禄8年(1695)、丸岡藩主となりました。元は日向国延岡藩主(現 宮崎県延岡市など)でしたが、

領内に一揆が起こったために越後国糸魚川(現 新潟県糸魚川市)に移封となり、その後、さらに丸岡へ移封となったのです。この有馬家が延岡から糸魚川への移封の際に、延岡から神楽の舞人らを同行させており、丸岡へも随行させました。

清純は、延岡藩主であった頃の万治3年(1660)、曾祖父である初代延岡藩主有馬晴信の五十回忌にあたって、青信御霊社という有馬晴信や先祖を祀る社を建立し、そこに神楽を奉納させています。ちなみに、青信御霊社の「青信」は晴信を指していると言われています。

丸岡へ移封後、清純は青信御霊社を勧請し、移封の翌年の元禄9年には神楽を奉納していたと伝わっています。その後、青信御霊社には5代藩主である有馬誉純によって神楽堂が建てられています。

有馬家は、この青信御霊社以外にも、城下にある6社(上石木戸神明社、篠岡山栗木山山王社、荒町御蔵脇稲荷社、長畝村八幡社、小黒村向野愛宕社、中島天神社)に神楽を奉納させています。

江戸時代には、この神楽を舞うことは寺社奉行によって管理されており、藩の許可がなければ奉納は不可能であったようです。

丸岡まで随行してきた舞人たちは、『丸岡藩分限帳大概』を見ると、甲斐、森、金子姓の人たちの名前が見えます。彼らは、延岡藩でもどこの出身者であるかなどの詳細は伝わっていません。入江宣子氏によると、甲斐姓は延岡に多い姓だということです(入江宣子「福井県丸岡町長畝の日向神楽」『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 民俗芸能における神楽の諸相』)。

これらの人びとは、藩から禄をもらえる、藩お抱えの舞人でした。

舞人を延岡から連れてきて、そして、毎年恒例として



写真1 「越前国名蹟考」(当館蔵)

神社へ奉納しており、有馬家にとって神楽は大きな意味を持っていたようです。

また、当時の神楽の演目について、『越前国名蹟考』（井上翼章編、文化8年(1811)成立。以下、『名蹟考』（写真1)には、その当時のものが掲載されており、「天岩戸、幣神垂、魔弘、於喜恵、六礼、鬼神、獅子、注連神楽」の8演目が挙げられています。

幣神垂以下の7演目は現在でも同じ演目名が伝わっており、多少の変化がある可能性はありますが、同様のものと思われる。また、「天岩戸」は一つの演目を指すのか、複数の演目を指しているのか明らかではありません。また、この『名蹟考』記載のものが当時演じられていた演目の全てであるかは不明です。

## 2. 長畝日向神楽の歴史②

### ～丸岡藩から長畝村の人びとへ～

150年以上、神楽と共にあった丸岡藩ですが、明治4年(1871)、廃藩置県により藩が廃されます。これに

伴い、舞人たちに支給されていた扶持が止まってしまいました。

廃藩までは神楽の奉納があったと考えられますが、廃藩後は奉納されていたか分かっておらず、詳細は不明です。

そして、明治15年(1882)、日向神楽の存続に危機を感じた長畝村の有志により、「敬神社」という神楽講が組織され、神楽が継承されることとなりました。同年旧8月に初めて神楽を習ったことが分かっています。この時の敬神社のメンバーは12歳から23歳という若者5人でした。神楽を指導したのは森忠雄、金子弘義と名が伝わっており、この2人は丸岡藩で神楽を舞ってきた森家、金子家の者だと考えられます。

この敬神社へ継承の際に、敬神社から15円を志納して、面や衣装、太鼓など小道具も伝えられたといわれています。面や衣装などは現在も伝えられていますが、太鼓は、残念ながら、昭和23年(1948)の福井地震の際に焼失しています。この太鼓は、皮の張替えの折に、

写真2 「日州神楽保存之弁」『福井新聞』（明治16年5月19日付）



日州神楽保存之弁 丸岡石城戸町位坂 倭  
古典ヲ掌シ旧例ヲ守ルハ我國ノ美ニシテ我善政ノ然ラシムルノミナラズ文明ヲ以テ鳴リ開化ヲ以テ誇ル其俗総テ然ラザルハナシ必ズヤ然ラザルヲ得ザル者アリ此故ニ我政府ハ夙ニ古典ノ維持ヲ沙汰セラレ旧例ノ保存ヲ吟味セラル樂ニ譜ニ之ヲ調査セラレ之ヲ整頓セラルハ諸君ニ於テ已ニ之ヲ明知セラルベシ茲ニ我越前丸岡旧藩主有馬家ニ於テ貴重ナル伝来ノ古楽アリ日州神楽ト稱シ該家ノ祭典ニハ必ズ是ヲ奏セラレタリ抑モ此樂タルヤ恐クモ天照皇大神宮大神天廼窟室ニ閉居シ玉ヒシトキ八百万神ガ開扉ヲ謀リ奏セラレシ古楽ニ則トリ遺蹟ニ成リシ神楽ニシテ該家ノ伶人ハ祿ヲ嗣ギ職ヲ襲ヒ秘伝秘訣之ヲ口ニシ之ヲ筆ニスベカラザル者ナリ是以テ挙動ノ温和ナル翩旋ノ神妙ナル寔ニ神代ノ素ヲ徴シ上古ノ具ニ迫リ覺ヘズ知ラズ神徳ヲ仰ギ渴仰ノ念ヲ發スルニ足レリ然リ而シテ此樂ノ有馬家ニ伝来セシ所以ハ往昔日州延岡ノ城主タリシニ由リ而シテ此樂ノ有馬家ニノミ伝来ノ他ニ之ヲ伝来セザルモノハ他ナシ日州即チ日向國ハ天孫瓊々杵命初テ日向國高千穂峯ニ降臨シ玉ヒシ故ニ神代ノ事跡ハ尤モ速ニ此國ニ伝来シ物換リ星移ルモ尚ホ當時延岡ノ城主タリシ有馬家ニ伝来セシモノナリキ維新後廢藩ノ際伶人ハ士族ニ編セラレ古楽ハ不問ニ置カレ今ヤ殆ンド日州神楽其秘伝秘訣之ヲ千百世ニ伝フルニ由ナカラントスルニ似タリ丸岡北在長畝村ノ有志輩五六名深ク之ヲ憶ミ甚ダ之ヲ惜ミ旧伶人森忠雄金子弘義等ニ其秘伝秘訣ヲ授シ頗ル其技ニ熟シ全ク真妙ヲ得タリ是ニ於テカ樂器ヲ新調シ衣裳ヲ購求シ該村ノ氏祭丸岡國神々社ハ祭アル毎ニ趣チ之ヲ奏セリ輒今ニ至リ盟ヲ立テ社ヲ結び名ケテ敬神社ト稱シ此樂ヲシテ天長地久永遠無窮ニ伝ヘンコトヲ計画シ広ク諸神社祭典ノ招聘ニ応ジ神慮ヲ奉慰セントス江湖ノ神官氏子諸位奉崇依ノ神社祭典ニ此樂ヲ奏セシメラレンコトヲ祈禱ス敬神社其名其美ニ背カズ蓋シ是レヲ上政府ノ意ヲ体シ下人民ノ分ヲ守ルモノト謂フベシ諸君若シ敬神社員ヲ招聘セント欲セバ乞フ郵便ニ託シ之ヲ長畝村前田氏ニ計ルベシ矣

胴の内側に延宝5年(1677)のものとする記録があったとされ、延岡から持って来たものではないかと思われるものでした。

この時に譲られたものの中には神楽の詞章を綴ったものもあります。一つは『神楽句集口伝』とあるもので、森忠雄家に伝わったと思われ、文久3年(1863)という年号と「丸岡之神職 森右膳藤原忠寄」と記されています。「神職」と記されていることは大変興味深いものです。全国的に見ると神楽は神職によって舞われていたようで、そうしたことから、日向神楽の舞人たちが「神職」として神楽を舞っていたのかもしれませんが。(残念ながら、現在、『神楽句集口伝』の原本は、保存会には複製のみとなっています。)

位坂倅という国神神社(坂井市丸岡町)に関係する神官と思われる人物による「日州神楽保存之弁」と題された『福井新聞』(明治16年5月19日付)(写真2)への投書があります。それによれば、敬神社は長畝八幡神社のみならず、国神神社でも神楽を舞っていたようで、その他でも招かれれば舞うつもりがあることが記されています。この投書からも敬神社の人びとの日向神楽に向けた情熱の断片を見ることが出来ます。

敬神社は、明治29年3月22日に日清戦争の祝勝会で、三国町(現坂井市三国町)の氷川神社で舞われた記録(『有馬家世譜』)があり、また、明治42年9月の皇太子(後の大正天皇)の行啓の際にも台覧に浴し、もともと広く知られていたところに、さらに認知度が高まり、活動も盛んになったと考えられます。

しかし、昭和に入ると退潮の傾向も見られたようで、昭和15年11月7日付『朝日新聞』によれば、「近年だんだんとすたれてゆく傾向があり」とあり、しかも、「事変勃発後(筆者注 昭和12年(1937)に始まった日中戦争のこと)は例祭のときの奉納も取止めていた」とあることから、退潮気味であったところに日中戦争も始まり、神社の祭礼の日の奉納も取りやめていたようです。しかし、この昭和15年は、初代天皇である神武天皇即位から2600年目にあたる記念ということで、全国各地で奉祝行事が行われており、長畝でも小学校の講堂で長畝村の人びとを集めて神楽を見てもらおうという企画をして、保存と伝承の機運を高めていたようです。

### 3. 日向神楽の現在

戦後に入り、昭和23年(1948)に福井地震があり、神楽関係の資料の一部は、先に紹介した太鼓を含め、焼失したといわれています。

その後、敬神社は「日向神楽保存会」と名称を変えました。昭和26年に規約を制定したとあるので、この時を以て変更されたとみるのが適切であろうと考えられます。そして、昭和28年に県の無形文化財(現在は無形民俗文化財)に指定されています。保存会へ名称を変更した経緯は、文化財として指定されることに関わりがあるとも考えられますが、経緯の詳細は分かっていません。

その後は、現在に至るまで、長畝の人びとによって伝えられています。

かつては長畝八幡神社の祭礼の日である、旧暦8月14日、15日に舞われていましたが、祭礼の日が旧暦の月遅れである9月14日と15日となり、数年前からは9月の第3土日に変更され、その日に舞われています。

また、文化庁による国際交流事業により中国で公演を行ったり、宮崎県延岡市や坂井市内の各地のイベントなどに呼ばれて公演するなど、祭礼の日以外でも、年に数回は舞われています。

長畝八幡神社には、長畝の人びとによって平成21年(2009)に設けられた「日向神楽伝承館」があり、面や衣装などの展示のほか、これまでの長畝日向神楽に関わる資料が数多く集められており、現在でも神楽を伝承することに対して、熱心であることが窺えます。

### 4. おわりに

今年は、明治維新から150年を迎えています。江戸幕府から明治政府へと政治のあり方が変わり、神仏分離、<sup>はいぶつ</sup>廃仏毀釈などによって神社や寺院もあり方が変わったのに伴って祭りのあり方なども変わってきました。

今回紹介した長畝日向神楽の場合も、政治のあり方によって、伝承の形を変えたものの一つです。長畝の日向神楽は、藩によるお抱えであり、そうした点では能楽などの芸能と同じくところです。

丸岡藩の神楽は、長畝の人びとの熱い思いによって、受け継がれてきました。

県内では、小浜市の雲浜獅子(福井県指定無形民俗文化財)も同様に、藩のお抱えであったものが、雲浜村の青年達に受け継がれたものだと言われています。

明治維新によって、変化したものは政治だけではなく、今でも受け継がれる祭なども大きな影響を受けているのです。

(川波久志)

4月

- 12日(木)  
石川県立歴史博物館来館(資料貸出)
- 19日(木)  
福井県立若狭歴史博物館来館(資料調査)
- 29日(日)  
京都国立博物館来館(資料調査)

5月

- 19日(土)  
ふくい歴博講座「神仏分離と合祀」(研修室)
- 20日(日)  
東京大学史料編纂所来館(資料調査)
- 23日(水)  
福井市郷土歴史博物館来館(資料返却)
- 23日(水)～6月1日(金)  
燻蒸のため、休館



ふくい歴博講座「神仏分離と合祀」(5月19日)



特別展「福井震災70年」起震車体験(6月30日)

6月

- 3日(日)～9月30日(日)  
写真展「幕末明治 福井のすがた」(エントランス)
- 5日(火)  
福井信用金庫株式会社来館(資料調査)  
石川県立歴史博物館来館(資料調査)
- 7日(木)  
福井県陶芸館来館(資料返却)
- 9日(土)～7月14日(土)  
特別公開「あわら市北本堂 神明神社  
観音堂の十一面観音菩薩像」(オープン収蔵庫)
- 12日(火)  
福井県立若狭歴史博物館来館(資料調査)  
越前古窯博物館来館(資料返却)
- 23日(土)  
熊本県立美術館来館(資料調査)
- 28日(木)～8月19日(日)  
特別展「福井震災70年  
…記録と記憶を未来へつなぐ…」(特別展示室)
- 30日(土)  
特別展「福井震災70年」  
展示説明会および起震車体験

7月

- 1日(日)  
特別展「福井震災70年」特別講演会  
「福井震災から学ぶ、未来への防災の備え」  
講師：木村玲欧氏  
(兵庫県立大学 環境人間学部准教授)(講堂)
- 5日(木)  
福井県立子ども歴史文化館来館(資料貸出)
- 11日(水)  
群馬県立歴史博物館来館(資料調査)
- 15日(日)  
特別展「福井震災70年」展示説明会
- 19日(木)  
あわら市郷土歴史資料館来館(資料貸出)
- 21日(土)  
ふくい歴博講座「福井震災」(研修室)
- 30日(月)  
京都国立博物館来館(資料貸出)

特別展

## 幕末維新の激動と福井

— 近代日本の夜明け前、福井が描いた国の姿 —

平成30年9月22日(土)～11月4日(日) 会期中無休

<観覧料> 一般 500円 大学・高校生 400円 小中学生・70歳以上の方 300円 ※20名以上の団体は2割引

[編集・発行]

福井県立歴史博物館

〒910-0016 福井市大宮2-19-15 TEL0776-22-4675(代)  
http://www.pref.fukui.jp/muse/Cul-Hist/

ふくいミュージアム

No.58 平成30年8月22日発行